

音樂の味ひ方

(フレイベル紀念日講演會講演筆記)

理學士 田邊 尚 雄

序

音樂の組織、發達に關して、我國では從來あまり理論的研究が行はれなかつた、これは音樂をほんの慰みに過ぎぬもの位に考へる人が多かつたからでいづれも音樂の發達、組織に關して研究を試みたことがないからである。

泰西の社會に於ては、音樂が大いに重んぜられ音樂に關する大體の智識は常識として心得て居ねばならぬといつた調子であるから日本に於けるとは大いに趣を異にして居るわけである。日本では音樂を餘分な藝事のやうに考へてゐるけれども、西洋では音樂は教養ある人格の一要素と考へられてゐる。それが爲めに西洋では音樂の試験に及第

しなければ、何の先生にもなることが出来ない、といふやうな規定をさへ設けてゐる國があるのである。

日本では江戸時代には、かなり盛んに音樂が行はれてゐた、しかし明治時代に入つてから、他の方面に於ける啓蒙運動にいそがしかつた爲めに、音樂の事は一時顧みられなかつた。それが爲めに音樂はあまり行はれぬやうになり、従つて音樂に關する研究も行はれなかつたのである。しかし世も大正に入つた今日では却々そんなことを言つては居られない。

一體國の發達状態と音樂とは大なる關係を持つてゐるものであつて、隆盛に赴いて居る國は必ず立派な音樂を持ち、之と反對に衰頹しかけて居る

國は音樂も亦頗る振はないものである。それ故に音樂の研究といふても却々道樂半分の仕事ではない、國力振張の上に大なる影響を及ぼすものであるといふことを考へて、これが研究の益々盛んにならないことを希はなければならぬのである。

音樂とは如何なるものか、この問題を一通りお話すことは實に容易なことではない、殊に日本人のやうに、この方面に關する智識の延びることを長い間制してゐたものには、却々簡單に話し終ることは困難である。極く初歩のことから話してゐるとこの講演が何時間かゝるか分らない。それで僅か三時間ばかりの内に音樂といふものゝ、大體を分るやうにお話するには荒筋を申上げるより他仕方がない、それでこの講演が極めて簡單で大體を述べるに止まるものであることを前以ておことわりして置く次第である。今日御出席になつて居らるゝ方々の中には音樂を御研究になつて居らるゝ方もおありであらうが、一般の説明を容易な

らしめるために、それらの方々にも、極めて初歩の智識に關する説明を聞いてゐて頂かなければならないことをもおことわり申して置く。

音樂の講義はたゞ口だけでお話したのでは却々腑には落ちないものである、乃で私は説明の補ひとして蓄音機を用ゐる。しかし一枚のレコードが五分かゝるので、一時間に十二枚しかやれない、三時間たてつゞけに蓄音機ばかりやつてゐても三十六枚しかやれないのである、乃で蓄音機も十分にお聞かせすることが出来ないことになる。すべてに於て今日の講演は時間が尠い爲めに十分な説明をすることが出来ないのば甚だ遺憾であるが、これはいづれ他日何かの機會に於て補講したいと思ふ。蓄音機なども、日本では蓄音機屋が縁日に浪花節を聞かせたり、家庭に於ても、ほんの玩具と等し並みに見られてゐるやうであるが、外國では活動寫眞と共に學校に於て應用せられ、大いに説明の不備を補うてゐるのである。

音樂の組織

日本の家庭に於ける音樂は今實に混沌として居る、娘か息子が西洋音樂を生嚙りする、父親が謠ひをうなる、母親が長唄をやるといつた調子で、お互ひに樂器を合せて一家が睦しく團欒するなどといふことは出來ない。歐羅巴の家庭では樂器が違つても一家中で同一の曲目を合奏して樂しむことなどが出來るのである。尤も日本でも江戸時代

には三味線が家庭の音樂の中心となつてゐて、統一が行はれてゐたのである、けれども今日では三味線といふ樂器が世間から幾分卑しめられてゐるために、中流以上の家庭で一家揃つて三味線を弾くなどといふことは一寸出來にくいのである。日本では平安朝時代が一番よく家庭音樂が發達してゐた。日本の家庭音樂の沿革及び將來に對する希望に就ても十分述べたいのであるが、今日は先きを急ぐためにこれらの問題をすべて略し、直ちに音樂の組織といふ問題に移ることとする。

音樂の組織をお話するには、音樂の形式と内容とに就てお話しなければならぬ。

一體形式と内容とは如何なる藝術にも備つてゐるものであるが、音樂に於ては殊にこの形式と内容が矢笠しい。音樂には全然内容といものを離れて形式だけのものがあるのである。家庭音樂としては形式音樂がいゝか、内容音樂がいゝかなぞといふことも却々問題とされてゐるのである。

理論の順序から言へば、これからすぐに作曲法のお話に入るといゝのであるが、それでは六ヶ敷くなるから、先づ音樂の内容のお話をする。

音樂の始まりは形式音樂であつて、内容音樂ではない。これは素人考へには内容樂音が先きであつたやうに考へ易い。鳥の聲をきゝこれを眞似やうとした時、そこに音樂が現れる、即ち内容を主とした音樂が先づ起るのであると、成程この説

は一應尤らしく聞えるけれども正しくはない。或る心のはたらきがあつて、これを何かの方法で音として外部に現さうと人間が努める時、そこに始めて音楽が現れる、これが音楽の始まりであり、形式を主とした音楽は即ちこれである。

音楽の要素となるものは三つある。それは拍子旋律、和聲である。拍子とは普通語の拍子と同義で、英語にいふリズムである。旋律とはふしのことであつて、音のあがりさがりである。和聲とは多くの音を組合せて出る音で、英語にいふハーモニーのことである。すべての音楽は以上三つの要素から成立つてゐるのである。然らば必ずこの三つが揃つてゐなければ音楽ではないかといふにそんなことはない。この三つの内のどれでも一つを備へてゐれば音楽となり得るのである。南洋土人の間には拍子ばかりの音楽がある。日本でも御會式の時に團扇太鼓を叩くが、あれが拍子ばかりの音楽といへばいへるわけである。南亞米利加には

又のべつに上つたり下つたりばかりしてゐる旋律の音楽がある。日本でいへば平安朝の朗詠なども旋律ばかりの音楽である。朗詠には簫、筆箏、笛等が奏せられるけれども、絃楽器は使用せられなかつた、而かも是等の樂器は朗詠の後から從いて行くだけであるから、朗詠の旋律とは何等の關係もなかつたのである。三味線音楽になると旋律以外に拍子が入つて来る、何故といふに絃いとが入るからである、絃が入れば必ず拍子が出て来るのである。拍子も旋律もなく、たゞ音だけを合せる音楽もある。扱て以上の音楽の三つの要素に關聯してお話を進めるのであるが、その前に一寸歐羅巴諸國の音楽的位置をお話してみる。

西洋の音楽の中心は伊太利と佛蘭西と獨逸の三ヶ國である。英吉利は北の方に離れて、島國である爲めに中心とはならなかつた。西班牙、露西亞、匈牙利、瑞典、諾威等は最近世に至つてやうやく隆盛になつたのである、殊に露西亞の音楽は十九

世紀以後には長足の進歩を遂げたけれども、それ以前にはホンの俗謠位があつたばかりで、頗る振はなかつたのである。

伊太利の音楽は旋律のみが異常の發達を遂げて居る、南國的な農麗な土地の影響を受けて節がはやかである、従つて伊太利のオペラは見るものではなく聞くものであるとされて居る。拍子のおもしろいのは西班牙、匈牙利などである。一體拍子のおもしろい音楽は中央亞細亞にあつたので、これが回教と共に亞刺比亞を経て、歐羅巴の是等の國々に入つて來たのである。しかし西班牙も匈牙利も拍子はおもしろくて結構であるが、他の方面が一向に發達してゐない。音楽の三ヶ國に就ていへば、佛蘭西が一番拍子がおもしろい。佛蘭西は西班牙と共に舞蹈の盛んな國である、従つて舞蹈と兩々相進んで、拍子の音楽が發達したのである。佛蘭西にグランド、オペラの發達したのはこの拍子を主とした音楽と舞蹈とが並び進んで來た

結果である。このグランド、オペラは實に立派なもので、かのワグネルさへも之を模倣しやうと試みた位である。グランドといふのは大きいといふ意味であるが、オペラそのものが大きいといふ意味ではなく、取扱つてゐる事件が大きいので斯く稱してゐるのである。要するに佛蘭西の音楽は舞踏と引離しては考へられないものである。

獨逸の音楽は如何といふに、獨逸人はチュートン人種であつて、ラテン人種のフランス人とは大いにその國民性を異にして居る。獨逸人は何か發表する際に感情だけを以て之を行ふなどといふことは決してなく、常に必ず理性を伴はせるのである。乃でこの理性的な獨逸國民の間には和聲が發達した。多くの音を組み合せることなどは理性的でなければ出來ない仕事である。日本人にも和聲は出來ない。ハーモニーはチュートン人種特有のものである。ハーモニーは紀元一千年頃チュートン人種の間から起つて來たものであつて、チュート

トシ人種の間で榮えてゐるのである。日本でも平安朝頃の音楽は餘程獨逸式で、ワグネルの事業なぞに似通つたものがある。がしかし日本人は音楽の上からいへば、伊太利人に最もよく似てゐるのである。ハーモニーの發達してゐる獨逸には旋律のいゝのがない。十九世紀の初め頃に、メンデルゾーンといふ旋律のおもしろい音楽者があつたがこれは調べてみると獨逸人ではあるが、伊太利で育てられ、伊太利的に教育せられた人である、そこで彼が旋律に巧みなること亦宜なる哉といふことになるのである。

歐羅巴の三ヶ國が以上の如く、音楽の三要素の一つ一つに於て秀でゝゐるのである、即ち伊太利の旋律、佛蘭西の拍子、獨逸の和聲といふことになるのである。

旋律の音楽の例としてはドニゼツチーの「ルチア」などがよろしい。

ゲータン・ドニゼツチー、一七九七—一八四八、非常に調子

のいゝ演劇的の作曲をした伊太利の作曲家、佛蘭西のグラン・オペラの起源には忘るべからざる關係を持つ人である。

「ルチア」にはルチアといふ女が狂亂する場景があつてこれが非常に六ヶ敷い、歌劇女優の手見せには恰好の曲である、伴奏に笛を用ゐて非常に六ヶ敷い旋律の歌をうたふ、しまひには笛と聲とが一緒になつて分らなくなつて了ふ、すべて旋律を綺麗に綺麗にと心掛けて作られた曲である。(蓄音機)。伊太利には斯ういふ風に旋律のすぐれた曲が多い、そこで女優などは皆伊太利を有難がり、自分の藝名なども伊太利人のやうな名をつけるのである。

拍子の音楽の例は、グラント、オペラから取つて來るといふ、先づマイエル・ベールの「預言者」などがよからう。(蓄音機)

マイエル、ベール、一七九一—一八九四、獨逸の作曲家、伯林で生れ巴里で没した。

一體佛蘭西の音楽の特徴は拍子のおもしろいといふことゝ、貴族的であるといふことゝの二つと

ある、而してこの特徴は英吉利と波蘭土とに影響してゐる、但し波蘭土へは拍子のおもしろさのみが影響してゐるのである。拍子がおもしろく、貴族的であるといふこの特徴をみるにはサン・サエンの「ヘンリー八世」なぞがいゝと思ふ、これは沙翁の原作へ作曲したものであつて、前半はモリス、ダンス、後半はシエフアード、ダンスから成つてゐる。(蓄音機)

和聲の音樂の例としてはワグネル(一八一三—一八八三)のものなぞがいゝ、一體に獨逸の音樂は威力的で、力強さの感じが迫つて來るのが多いワグネルは非常に理性的で、常に何うしたら人を抑へ付けることが出來るかといふことを考へつゝ、作曲してゐたのである。彼はマイエル・ベールを聞いて大いに發奮し、これに真似て「リエンチイ」を作つた、これは全體で五幕あるが、その幕開きには革命軍の大將が出て來て、喇叭が鳴つたり、議會で祈禱をしたりする、而して貴族の跋扈を罵り

市民を熱狂せしめるところがあるが、グラント、オペラの真似で、拍子がおもしろく、獨逸流でない。(蓄音機) ハイドンに始まり、モツァルト、ベートーベン、シューベルト等に至つて大成されたシンフォニーは和聲の例として最も適當なものである。シユニーベルトの作つたシンフォニーに有名なものが二つある。シンフォニーとは第一部以下第四部に至る四曲部から成立つ管絃樂である、シユニーベルトにはこの四曲部を完成しなかつたシンフォニーがある。「未完成のシンフォニー」と言つて一寸有名である。(蓄音機)

以上で大體音樂の三つの要素のお話が終つたわけであるが、右の内拍子が一番分かり易く且つ人を感動させ易い。一番六ヶ敷いのは和聲である。茲で一寸保育に關係のある話は、子供が四歳か五歳になつたならば、子供の後から兩手を持つて拍子を取ることを教へてやるとよろしいといふことである、さうすると子供は先づ拍子が分るやう

になる。五歳位になつたならば、旋律ふしを教へてやるとよろしい。子供には先づ正しい音階を耳に入れてやるやうにしなければいけない。子供には半音の入つた歌などは教へないやうにしなければならぬ。半音は不自然なものである。全體子供に教へる歌は文句は分からなくともいゝから旋律ふしのはつきりしたものをやらせなくてはいけない、子供に音樂の素養を附けやうとするならば、子供の唱歌に内容（意味）を要求しないやうにせねばならぬ、この點からいふと「もしもし龜よ」の如きお伽噺の歌はあまりよろしくない、何故ならばお伽噺の歌だと子供がその内容を熟知して居り、歌の文句に氣を取られて了ふために、音階の狂ふことに少しも氣が附かないやうになるからである。子供に唱はせる唱歌は子供に分り易い音階から成立つて居り、旋律ふし自身の面白いものでなければならぬ。一體音樂といふものゝ要素は音階であつて内容ではないのである。

内 容

音樂が何をあらはしてゐるか、こんなことを考へるやうになるのは餘程人智が進んでからである。歌の文句に依つて或る事件を人に物語るといつたやうなもの、例へば日本の義太夫の如きものは文學が主であつて、音樂は寧ろ従の地位にあるのである。音樂といふものは言葉に附屬してゐる内は發達するものではない。形式音樂といふものは六ヶ敷く、教養のあるものでなければ理解することが困難である。鎌倉時代以後の日本音樂は内容音樂であつたために、純粹の音樂としては大した進歩がなかつた、しかし後になると謠曲うたひが起つて、やゝ形式を備へるに至つた。けれども謠曲うたひの聲は東夷あづまびとの聲である、あまり感心の出來る聲ではない。女が謠をうなるなどは以ての外である。日本音樂をして純音樂ならしめ、世界的ならしめる爲めには西洋音樂の様式に則るか、さもなくば我國

の平安朝時代の音楽を復活せしめ、之を十分に研究して、發達せしめるより外に方法はないのである。以上は音楽に言葉を内容とした場合に就てお話ししたのである。

内容音楽には尙自然の音を真似るものがある。その中で一番下等なものは模寫音楽である。これは自然の音を少しも變へずにそのまま、真似やうと努めるものである、これは音楽の極めて幼稚なるものである。自然の音といふものはそんなに美しいものではない、うぐひすの聲と雖も、音楽には劣るのである、この模寫音楽は主に亞米利加などには流行するのである、亞米利加人はお金を儲けて他國から上手な音楽者を聘することが出来るので自分からあまり研究しやうとしない、従つて音楽はあまり發達してゐないのである、それが爲めに幼稚な模寫音楽などを喜び、自動車の音や飛行機の音を真似て悦に入つて居るのである。尤も模寫音楽をわるいと言ふのではない。音楽的要素の甚

だ尠いものではあるが模寫音楽も亦音楽と言ひ得ないことはないのである、團十郎も役者であり、「申上げます」をいふ無名の役者も役者であるといつたやうなわけである、私はこの意味で模寫音楽の存在を否定しはしない。否、音楽の入門としては或は模寫音楽などは大いに適當なものであるかも知れないのである。浪花節なして野卑だから撲滅して了へとあせる必要はない、浪花節を入門として音楽に入つて來る人もあり得るとするならば浪花節も一の方便である。浪花節をさう何時までも有難つてゐる人もないであらう、こんな音楽的要素の尠いものには直きに飽きが來て、今度は長唄をやらうなぞといふ風になり、漸々と發達して行くものなのである、何時まで經つても、浪花節が面白いなぞと言つてゐるのは、何うかしてゐるので、音楽的低能とでも名くべき人である。模寫音楽の例として「黒い森」といふのを蓄音機でやつてみやう。これは森の中の狩獵をあらはしたも

のである、鐘の音、馬蹄の音、鳥の聲、ホルンの響、獵犬の鳴聲等を巧みに組み合せたもので、これを聞いてゐると、丁度活動寫眞でも見て居るやうに、狩獵の様子があり／＼と想像されるのである。

この「黒い森」の如きは、たゞ自然の音を描寫したのみである、従つて音樂としては程度の低いものであつて、先づ遊戯と看做されても止むを得ないものなのである。この單なる自然の模寫が一步進むと詩的描寫といふことになる、これは想像の餘地を残して、自然を描寫するので、同じ雀の聲を表すにしても、雀の聲そのまゝを表さずに、これを音樂的に變化して表すのである。すべて自然をあるがまゝに表さずに音樂的變化を試み、氣分を以てこれを表すやうに努めるのがこの詩的描寫の特徴である。ロシニー作の歌劇「ウイリアム、テル」の序曲中にある「暴風」「うらゝか」と題するもの、如きは、この詩的描寫の例であつて、前者は

最初暴風雨が荒れまわつて居るが、やがてしづまつて、空が霽れ、日の光が照りわたるといふ經過を氣分で描寫してある、後者は暖かいやうな、うらゝかな心持があらはれ、時々鶯の聲も聞える、しかしこれは音樂的に變化されてゐて、氣分氣持といふもので表されて居る。

單なる自然の描寫を尋常科とし、詩的描寫を高等科とするならば、もう少し理性が發達して來て中學程度となつたものは標題音樂である。標題音樂の例として露西亞のチャイコフスキー作の「一八一二年」といふ曲の説明をしてみやう。これは極めて興味のある曲で、宛然歴史を讀むやうな感じを與へるのである。「一八一二年」といふのはナポレオンが露國に遠征して、モスクワで雪に降り籠められ、終に脆くも露軍のために打敗られて潰走する纏末をあらはした音樂である。かゝる複雑な内容が何ういふ風に取扱はれてゐるかといふと始め佛國々歌を繰返して、後のを前のよりも旺ん

に演奏する。

それで佛國の國力の膨脹して行つたことを現すやがて國歌が駈け足で奏される、これは軍隊が露國へ向つてドン／＼出動するところである、やがて雪が降つて来る。これも音が降つて来て、音が積るのである、やがて戦が始まる、これは佛國々歌と露國々歌との混合によつて表される、佛國々歌が漸々勢ひを失つて来る。露國々歌がそれと反對に明瞭になつて来る、即ち佛軍が敗北し始めたのである、やがて佛國々歌がバラ／＼なものになつて了ふ、露國々歌がもう一度明瞭に奏される、これで佛軍が潰走して、露軍が勝利を得たことになるといふやうな調子に出來上つて居るのが標題音樂である。

作曲

琴の「六段」には意味がない、これを聞いてゐても何の意味かさつぱり分らない、しかし何となく

面白い、これは形式を味つて居るのである。全然内容を離れて、形式を味ふといふことは音樂、以外の他の藝術には稀である。形式は作曲法に依つて出來て居るのである。

作曲法は音樂の方でも却々重要な問題で、而かもこれが分らなければ西洋音樂は半分は分らないのである。

日本にも作曲法といふものはある、長唄には長唄の作曲法があるのであるが、これは未だ組織的に研究せられて居ないので、非常に煩雜である。

歐羅巴の音樂には二種の作曲法がある。その一つはコントラストである、これは譯せば對比といふのであるが、今日ではコントラストといふ言葉は日本語化されて居るからコントラストの方が反つて分りがよいと思ふ、コントラストとは或る物を示し次で之に反對の性質の他のものを示す方法である。シヨパンの送葬進行曲フニナラルマーチはこの作曲法の一例である。

初めは殘された人々の悲哀をあらはす爲めに、非常に低い物哀しい短音階のくさりがあり、次いで死んだ人の天上する喜びをあらはすために、旺んな明るい長音階のくさが續く、そこでコントラストが出来るわけである、斯くてシヨバンの送葬曲は、一高一低、送葬曲として頗る要領を得たものを形づくつて居るのである。(蓄音機)

送葬進行曲には有名なものが三つある、ベートーベンの作曲とハイドンの作曲とシヨバンの作曲とが之である、この中最後のシヨバンのが一番よく用ゐられてゐる。シヨバンは波蘭土に生れた佛蘭西人でマヅルカを佛蘭西に輸入したピアノストである(一八一〇—一八四九)

世界中で俗謡の面白いのは伊太利と露西亞である。露西亞の俗謡にはコントラストが實によく應用せられてゐる。「コサツクの守唄」などは實に立派な音樂である。(蓄音機)、何ういふわけで露西亞に斯る立派な俗謡があるかといふに、これは宗教のお蔭である、といふのは露國の國教は希臘教である、希臘教ではオルガンを用ゐずに聲ばかりで聖歌を唱へるのである、つまりユダヤから東羅馬

(希臘)に入つた宗教音樂が佛蘭西や伊太利に行かずに露西亞に行つて了つたのである、乃で露西亞の宗教音樂は非常に優れたものとなつた、而してこの宗教音樂の影響を受けた俗謡も亦優れたものとなつたのである。従つて露西亞には優れた音樂家が尠くない、ルービンスタイン(一八二九—一八九四)などは、ふうわりとした奇麗な曲を作つたのである。

作曲法のもう一つの形式といふのは變形であるこれは規則に従つて、旋律を漸々に變化させて行く方法である、つまり日本音樂に云ふところの本手、替へ手のことである。尤も日本では本手、替へ手を同時に行つて了ふが、變形といふのは同時に行ふのではない、三味線樂などでは本調子と同時これよりも高い上調子が入るのであるが、變形といふのはつまり本調子がくさりあつて、その次ぎに上調子が始まるといふやうなわけなのである。ハイドンのシンフォニーの中に「サーブ

「マイズ、シンフォニー」を名けられるものがある。これは急に際立つた變形をするので、聽者がびっくりするのでサーブテイズ(驚愕)といふのである(蓄音機)

以上に大體説明したところのコントラストと變形とが形式の根本である、即ち作曲法の土臺となるのである。

作曲法の内一番六ヶ敷いのがシンフォニーとソナタである。シンフォニーとソナタとは同じであるが、たゞその異なる點はソナタが一二の獨奏樂器の曲なるに反して、シンフォニーは管絃樂器の曲であることである。

シンフォニーを分り易く説明するために、シンフォニーを算術の問題と見て説明すると、先づ第一に問題が次る、これは二つ出るので、第一の問題が出、次ぎにそのコントラストが問題となつて出るのである、次ぎにこの二つの問題を計算する最後に最初の問題を二度繰返して、そのシンフォニーは終るのである。

以上が音樂の組織に關するお話である、これか

ら西洋音樂の發達のお話を極くざつと申上げてこの講演を終る。

發 達

音樂史の方では、紀元千年以前をば上古時代といふ。この上古時代を分けて希臘音樂時代と羅馬音樂時代との二つとする。希臘では内容を主として、形式は未だ現れなかつた。我國の奈良朝時代も内容が主で形式はなかつたのである、羅馬では形式音樂が行はれた、併したゞ聲の上げ下げがあつたゞけである、我國の平安朝時代もさうである希臘音樂の例としてはデルフォイから發掘された「アポロの歌」の音譜(二千五百年ばかり前のもの)に依つて之を窺ふことが出来る。(蓄音機)羅馬音樂の例としてはグレゴリー法皇の選んだ「グレゴリアン・シャント」といふのがある、これは千五百年ばかり前のものである、ハレルヤを上げたり下げたりして幾度もうたつてゐるだけで、甚だおもしろくないものである。(蓄音機)。紀元八百十四年に作られたシャールマン大帝葬送の歌がある、これも一本調子で甚だ振はないものである。(蓄音機)

要するに上古時代の音楽はあまり太したものはなかつたのである。紀元千年頃になるとチュートル人種が複音の音楽を作つた（蓄音機）併し始めの頃の作はどれもあまり感心の出来るものではない、十一世紀頃になると幾らかいゝのが出来るやうになつた、複音の音楽は佛蘭西の北部を過ぎて、英吉利に入つた、この頃から複音の音楽は非常に發達した、この發達の主動者となつてゐたのは、言ふまでもなくチュートル人種で、十六世紀頃まで音楽史上極要な地位を占めて居た、これをネーデルランド派といふのである。これは和聲の方面であるが、旋律の方面に就ていふならば、この方面は俗謠の影響を受けて發達して來てゐる。十七世紀の初頃までは音楽といへば全く宗教會の事業であつたのであるが、一般俗社會にも音楽がなかつたわけではない、その旋律は不幸にして今日に傳はるものがないけれども、當時の文獻に徴して、これのあつたことは確かだ、是等の旋律は屢々上述の和聲家に好箇の旋律を供給したのである殊に注目すべきは十二世紀より十四世紀にわたり

詩歌界の新機運と共に盛況を呈した俗謠の流行である。この時代は十字軍時代で、佛蘭西、獨逸あたりの武士が盛んに俗謠を作つたのである。即ち佛蘭西に於てはプロヴァンス地方にトルバゾールの歌、獨逸に於てはミンネ歌人の歌がこれであるトルバゾールの歌は澤山あるが、その中で「シャレン・ド・クーン」や「アダム・ド・ラ・アール」等が最も有名である。（クーンを蓄音機にて演奏す）十五世紀頃になると俗樂が漸次宗教樂に近づき、宗教樂も俗樂に近づいて、兩者のけじめがあまり著しくなくなつた。ネーデルランド派の後に伊太利にラテン人種の音楽が起つた、これが文藝復興期で、それから近世に入ることになるのである。中世千年間のあひだで一番偉い音楽者は中世の末に出たネーデルランド派のオルランツス・ラツススである。ネーデルデンランド派は彼に依つて大成され、その樂風は歐羅巴に至る所にひろまり、それに依つて獨逸、伊太利は共に光輝ある國民樂を創始した。彼の音楽は流暢な旋律に富み、豊麗勇壯な和聲を存してゐた、彼は歐羅巴の諸王より「音楽の王」と

稱された。

ラッススから五十年ばかり経つと文藝復興の運動が始まつたのである、そしてこの影響を受けた音楽は大變その趣きを變へるやうになつた。

中世は神様の夢をみて居た時代であつて、その音楽も亦夢の音楽である、文藝復興以後はこの夢から醒めて人々が皆現實の土臺の上に立つやうになつた。文藝復興以後に出た音楽家は縁の下の力持ちをしてゐたやうなもので、あまり顯はれては居らぬ。

十八世紀になるとバハ(一六八五—一七五〇)とヘンデル(一六八五—一七五九)の二人が出て近代音楽の基礎を作つた。しかしこの二人は未だ中世の影響から脱し切つてはゐなかつた。それからハイドン(一七三二—一八〇九)が出るのであるが、彼になるともう中世の影響はない、ハイドンの次ぎがモツアルト(一七五六—一七九一)それからベートーベン(一七七〇—一八二七)といふ順になるのである。

モツアルトはハイドンと同時代で、モツアルトが二十歳頃にハイドンはもう七十歳位の老人であ

つた。モツアルトは生れながらの音楽者で、二歳の頃、抱かれてピアノ臺にやつとつかまることが出来ると時分彼がピアノの鍵盤の上に手を觸れるとちやんと、立派な曲になつてゐたといふことである、而して五歳の時分にはもう世界第一流の作曲家となつて了つた、彼のオペラは皆彼が小學校時代に作つたものである、彼の傑作は大抵十代の頃に作られたものである。而して三十歳ばかりで早世して了つた。この偉い二人に仕込まれたのがベートーベンである、ベートーベンは元來感情家であつて、音楽家としての資質を備へてゐた、それがハイドンの弟子となつて、作曲法を教はりモツアルトから天才奔放の氣を受けて、立派な音楽者となり得たのである、ベートーベンは世界の音楽者の内で富士山にも譬へらるべき、完成される音楽者である。ドビュッシーの音楽がいゝの何のといつても、それは富士山に較べては妙義山が面白いといふやうなものである。

ベートーベンに至つて始めて形式と表情とが一致するやうになつた。ベートーベン以後はこの二

つが却てうまく揃はないので、形式の方はかまわずに表情だけがうまく出来てゐればいゝことにした、これが十九世紀のローマンチック派の音楽である。

ローマンチック派の音楽者にはメンデルゾーン、ショパン、シューマンなどがある。

シューマンは餘程感情家で、不仕合せ人である始め音楽者にならうとした時両親が不承知のために十分な學費を得ることが出来ず、新聞記者になつて自活しながら音楽の研究を續けたりなぞした一時は絶望してライン河へ投身したが、救助されて目的を果たすことが出来なかつた、終ひには氣違ひになつて、癲狂院に送られ遂にそこで歿したのである。

違ひになつて、癲狂院に送られ、遂にそこで歿しローマンチック派に二派がある、獨逸派と佛蘭西派とがこれである。

西洋音楽は十九世紀になると、やゝ行き詰つた感じがある。それで二十世紀に入つてからは、無暗と變つたもの、珍らしいものを求めるやうになつて、手を換へ品を換へて何か珍奇なものはないかと探しまわつてゐたのである。それで瑞典や諾威やフィンランドの音楽に目をつけて、これを一

時擔ぎあげやうとした。アメリカインディアンの間に行はれてゐる音楽を變化した「新世界のシンフォニー」などといふ曲も一時持囃されたが、それもしばらくの間で、やがてズホール・サクスのものやうに非常に六ヶ敷い、といふよりはわけの分らない音楽が行はれ出した、これは丁度繪畫の方の立體派等に相當するもので、獨創性に富みすぎて、大いに譯の分らぬ曲を作り出すやうになつたのである。諾威のグリーグなども盛んにこの譯の分らぬ曲を作つたのである。

藝術の方面から見ると、歐羅巴の文明は今度の大戰争の始まる前に、既に大いに畸形を呈するに至つたのである。一面から言へば歐羅巴の文明が大いに畸形になつた爲めに、今度のやうな大戰争が起つたのであるとも觀察することが出来るのである。吾々はこの大戰亂の淨火に依つて、歐羅巴の文明がこれまでの類廢から救はれて生氣のあるものとなるであらうことを信じたいと思ふのである。(文責在記者)